

広がるトリ科学



国際鳥類内分泌学シンポジウムに向けて

小鳥から学ぶことばの起源

＝⑥＝

岐阜市で6月 市民公開講座

市民公開講座「広がるトリ科学の世界」(岐阜新聞・岐阜放送後援)は6月7日午後4時から、岐阜市長良福光の長良川国際会議場で。対象は高校生、一般。参加費無料。

私の研究室では、ジュウシマツという小鳥を使って、さえずりの研究をしています。ジュウシマツは東南アジアに棲(す)むコシジロキンパラという小鳥を、江戸時代の大名がペットとして輸入したのがはじまりです。

その後250年以上、ジュウシマツの子育て上手な性質と白くかわいい羽の色が、品種改良されてきました。その結果、ジュウシマツは飼いやすい鳥



岡ノ谷一夫教授

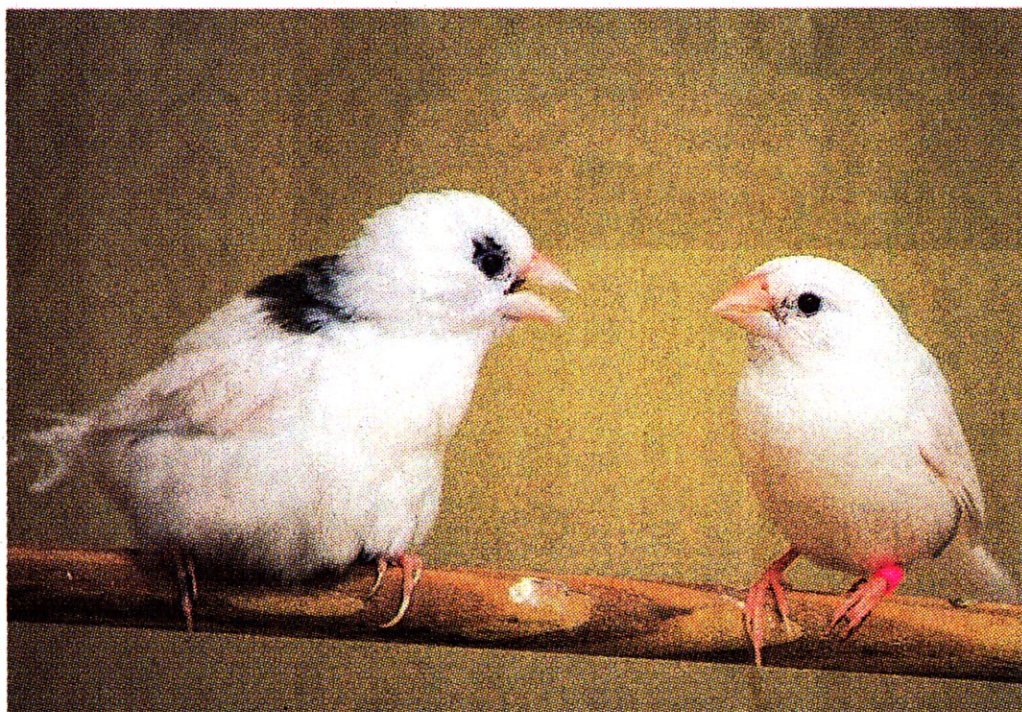
になりましたが、それだけではありませんでした。ジュウシマツのさえずりは、とても複雑な構造を持つようになったのです。

小鳥と人間には意外な共通点があります。小鳥はさえずりを、人間はことばを、親から学ぶという事です。人間のことばはいろいろな場面で使われますが、小鳥のさえずりは、オスからメスへの求愛のためにのみうたわれます。さえずりのこと

脳の構造、人間と共通点

東京大学大学院総合文化研究科教授

岡ノ谷一夫氏



親が子に「さえずり」を教えるジュウシマツ

はははが大きく異なりますが、これらを学ぶ過程と、学ぶために必要な脳の構造は、小鳥と人間ではとてもよく似ているのです。小鳥も人間も、これらの音声を学ぶには幼少期の経験が大切です。小鳥では生後1〜2カ月が、人間では生後数年が音声を学ぶのに重要な時期で、この時期を逃すとあまり上手にさえずる(話す)ことができなくなりま

す。小鳥も人間も、音声を学ぶためには親から教えてもらうのが一番です。小鳥のさえずりで、テープレコーダーやビデオからでは学習するの、小鳥のさえずりをお手本にするので、人間のことははじめから、小鳥のさえずりを研究するためのよとめられています。私たちが研究は「言葉はなぜ生まれたのか」(文藝春秋社)、「さえずり言語起源論」(岩波書店)などの本にまとめられています。

◇ 寄稿文、国際鳥類内分泌学シンポジウムに関する質問、問い合わせは、ISAIE2012岐阜・企画運営委員の川島光夫・岐阜大学応用生物科学部教授、電話058(293)2870。メールアドレス tokawasima@gif-u.ac.jp

